

U-net通信 2013年7月 Vol.75

発行：地球環境・共生ネットワーク 〒105-0014 東京都港区芝2丁目6番3号三宅ビル4F TEL:03-5427-2348 FAX:03-5427-5890 http://www.unet.or.jp 編集人：大山正治／発行人：比嘉義夫

あとから来る者のために
坂村 真民
あとから来る者
海をきれいにしておくのだ
田畑を耕し
山を用意しておくるのだ
あとから来る者
我慢をし
みんなそれぞれの力を傾けるのだ
あとからあとから続いてくる
あの可愛い者たちのために
みなそれを自分でできる
なにかをしてゆく
それ自分にできる
きらいにしておくのだ
あとから来る者
辛苦をし
あとから来る者
あとから来る者
川を
山を
種を用意しておくるのだ



EMで体に良い食を提供して飛躍を目指す山口県の農業

取材／大山

山口県と言うと、歴代で一番多くの首相を輩出している。現首相の安倍晋三氏も山口県出身、明治維新を先導した政治家や軍人の多くが山口県出身ということは良く知るところだ。先進的なEMでの浄化活動も山口県で、平成11年に現U-ネット理事の浦上卓三氏が中心となって進めた瀬戸内海浄化作戦が有名であった。13年に開催された瀬戸内海EMサミットへと結集して一定の成果を上げてきた。現在も県内各地で地道に活動がなされているが、今号では山口県世話人の新田孝氏と松田圓子さんにご案内いただいたEM農業の現場をご紹介する。



▲亀の甲農園入口で、
新田孝氏(右)
三隅忠典氏

▲亀の甲農園(山陽小野田市)のブドウ栽培ハウス内で、右から園主の
三隅忠典氏、江本武男氏、山口県世話人の新田孝氏
◆EM農法で野菜栽培する山口県世話人の松田圓子さんと
山口徳地EM友の会のメンバー

定例勉強会で活動が着実に拡がる 環境蘇生塾山口会

山陽小野田市は山口県の九州寄りで瀬戸内海に面し、日本初の民営セメント製造会社・小野田セメントの発祥地として全国的に知られる。この地を基点として環境蘇生塾山口会(新田孝会長)は同市及び周辺地域の方々による有機農業、生ごみの堆肥化、環境浄化等の勉強会を定期的に開催している。新田孝会長や事務局の江本武男氏らはEMによる生ごみの堆肥化や有機農業の現地出張指導も行っており、その成果も上がってきている。また、この塾で勉強された方がそれぞれの地域で有機農業や学校プール清掃、海や河川の浄化活動などを実践して、環境を蘇らせる運動は着実に拡がりつつある。

エコで有機の美味しいブドウ 山陽小野田市 亀の甲農園

山陽小野田市の丘状の土地に亀の甲農園(園主:三隅忠典氏)がある。一棟の農業用ハウスとしては大きい1000m²の鉄骨造り

の中でブドウが栽培されている。主な品種は今人気の藤稔で巨峰よりも大きく甘みと酸味のバランスがとても良いと評判だ。しかも、有機JAS認定圃場、ブドウ栽培で認定をとった例は極少ないのそうだ。栽培に用いる水はほとんど雨水だけ、ハウスの屋根樋から数個のタンクと地下タンクに導いて貯めた水(満タンで30m³)を利用する。ハウス内の圃場はバーク・焼却灰・炭・土・EMばかじを混ぜ合わせ、ふかふかの土壤を作りEM活性液を散布して完璧な有機土壤としてブドウが栽培されている。ハウス内でこのような土壤なので害虫や病気が発生しない。だから有機JAS認定がとれるのだと思う。ここでのブドウは安心安全で美味しいので化学物質過敏症対策団体からの推薦を得て団体の会員に出荷もしているという。

亀の甲農園のブドウ栽培はハウス利用で暖房費はかかるないし、水は雨水を利用しているのでエコロジー。しかもEMを活用した無農薬無化学肥料栽培、だから安心安全で美味しいブドウができるのだと思った。

自分の畑で実地見分を 山口市 山口徳地EM友の会

山口市徳地は山口市の東北に位置し約9割が森林という山間地だ。平安時代末期、奈良東大寺再建の時、ここから産出された大木が多く使われたことでも知られる。この徳地鯖河内地区で20年前からEMを使って環境浄化、花づくりや有機農業を実践しているのが松田圓子さん、山口徳地EM友の会の会長である。松田さんはご自身が胃を悪い、東城百合子先生の自然療法を勉強するようになって、病気にならないためには無農薬有機栽培の穀物や野菜の摂取が何よりも大事だということを痛感したからだという。それ以来、無農薬有機栽培にはEMが一番だと思って、今まで継続して使っている。

松田さんは自分が属する地域の野菜栽培グループ「千石岳グ

ループ」の会員が栽培して出荷する青果新鮮野菜の売れ残りや返品を減らすことに力を入れたいという。その為には会員の栽培技術の向上が必要との判断で、地元の公民館で福岡県の世話人であり限界突破で定評の森時雄氏を講師に招き「EMインストラクター養成講座」を開催して出荷野菜の品質向上を図っている。ご自身の自宅周辺の畑で栽培されるEM農法の野菜は、どれもが美味しいと体に良いものばかり。「自分の畑に見に来てくれれば分かります」と松田さんは語った。



山口市の山間部の休耕田を青空宮殿 同様の手法で耕作地に転換する
松田圓子さん



日本の美しい景観を守れ 京都府丹後半島

取材／村上

天橋立や周辺の景観を守る環境への取組に成果

宮津市や京丹後市で大きな活動をしているのは、京都地区世話人田中功氏や吉田玲一氏等、丹後U-ネットや自然を守る会などをはじめとする活動団体の方々である。主な活動としては、阿蘇海(宮津市)や久美浜湾(京丹後市)に流入する河川浄化、京都府北部最大の淡水湖である離れ湖の水質浄化と天橋立の松林保全などの環境浄化活動である。また、与謝野町の小学校9校による阿蘇海に流れ込む野田川からの水質浄化活動やどんぶち池・川からのEM活性液、EM団子の投入など、2012年度海の日には2,200個のEM団子投入や、1,100ℓものEM活性液の投入を記録している。

今回の取材ではその成果を見せて頂いたが、田中氏は満足していないという様子が伺えた。知恩寺文殊堂の近くを流れる文殊水道(天橋立運河)では、嫌な臭いも消えており、十分に誇れるものと言っても過言では無いのであるが、「成果が出た後の活動が低迷している」と継続する事の難しさや、それでも成果を持続出来ている現状には驚かされる。「このままでは以前の状態に戻ってしまうかも知れないが、その時がまたEMを伝えるチャンスである」という。

EM自然農法の大きな商業的成功例 京丹後市 有機JAS認定梅本農場

京都北部、京丹後市には知る人ぞ知る有機JAS認定の農場があ



阿蘇海を背に
京都地区世話人 田中功氏



2012年度物産展にての販売の様子
【梅本修氏(左)】

る、梅本修氏の経営する梅本農場である。※2009年に発行したU-net通信Vol.56でも京丹後市で初めて「有機JAS認定」された農場として紹介している。氏は公益財団法人自然農法国際研究開発センターで講師を務めるなど、この地域において有機農法の先駆けの存在となっている。講演の内容は、「私の仕事は土を作る事」という。実際に農場を拝見させて頂くと、広大な堆肥スペースがあり、そこで落ち葉や刈り草、海草の粉などを堆積しEMボカシを使って発酵、熟成し、これを畑に堆積させ苗を植える苗床に使っていた。また、EM活性液は苗床を作る際と病害虫対策のみに使用されているそうだ。

これはEM自然農法の大きな商業的成功例の一つとして、素晴らしい成果をあげている。

この農場は全体で3.4ヘクタールもある広大な農場である。ここで育った旬の野菜などを、インターネットのホームページなどを駆使し消費者に直接販売をしており、また味噌などの加工品などは載せる前に売切れてしまう程の人気振りである。丹後や丹波で採れる野菜は人気ブランド野菜であること、こういった盛況に更なる価値を付加しているのではないかと思う。



3.4ヘクタールの大有機JAS認定梅本農場



ベテランと若手の交流によりEM活動の活性化と拡大進む宮城

取材／三上

今年8月31日、待望の「善循環の輪 みやぎの集い」が仙台市で開催される。2011年4月に予定されながら、大震災で中止せざるをえなかっただけに、今回の開催には並々ならぬ意欲がみなぎっている。宮城県世話人の鈴木徹さんの案内で訪ねた。

同県では、大震災以後、環境や健康、食に対する不安等から、特に女性を中心にEMに高い関心を持つ人々が増え、「勉強会」が相次いで発足している。そしてEM活動歴の長いベテランと新しいEM活用者とが積極的に交流しながら、EM活動の活性化やレベルアップ、拡大が図られつつある。宮城県の新しい動きとともに、野生動物保護活動におけるEM活用の現場を紹介する。

農園で“最先端”的安全・安心な野菜づくり 仙台市 NPO自然食農みやぎー岩切ワクワク農園



NPO自然食農みやぎ（鈴木徹代表）は、現在、環境や健康に関心の高い市民・消費者を巻き込む活動を展開している。そのひとつが、岩切ワクワク農園と名付けた約600坪の貸農園の運営だ。訪ねると、4人の女性が作業に精をだしていた。野菜栽培は初心者という女性たちだが、鈴木徹氏の指導のもと、雑草に活性液を入れて発酵させた青草発酵液を用いて不耕起栽培を行っている。また土壤中の化学成分の吸着と保水のため麦を植えている他、畑の周りに活性液入りペットボトルを巡らし害虫を寄せ付けない工夫も施すなど、“最先端”的EM栽培技術が導入されている。なお、今後はEM水稻栽培や地元料理店へのEM栽培農産物提供など、市民・消費者を意識した目に見えるEM活動に意欲を見せている。

EM農産物の手料理を楽しみながら勉強会を開催 仙台市 小さな森（自然食を楽しむ会）



「小さな森」は、月1～2回、各家庭菜園で採れたEM農産物を持ち寄り、手料理の食事を楽しみながら、EMに関する勉強を行っている。震災直後、押し寄せる不安感にたまりかねた代表の千葉久美子さんがEM農産物を素材にした食事会を催したところ、元気が湧いたことから発足した。以来、メンバーは次々に増え現在13名。昨年は比嘉照夫教授をマンションに招いて食事会を開催したほか、今年は伊藤玲子さん（後述）からEM石けんづくりを教わるなど、活動に拍車がかかっている。「仙台におけるEM普及活動の拠点のひとつ」（鈴木徹さん）である。

子供を持つ女性たちが放射能対策の勉強会を主催 富谷町 おむすびの会



放射能を心配した、富谷町の子供を持つ女性4人が、2011年、放射能対策の勉強会として結成した。結成初年度に「NPOチェルノブイリのかけはし」代表の野呂美加氏を招いて勉強会を開催したところ、県内外から400名以上が参加した。その際に野呂氏からEMを奨められ、以来、EM生活を実践する一方、自宅周辺の線量を計測しながらEM散布を継続するなど、勉強会の枠を大きく超えた実力派団体に成長した。共同代表の増田恵美子さん、伊藤希代さん、鈴木郁子さんは、「勉強会を通じて、知ることの大切さと、知ってなおかつ一步踏み出す勇気を学んだ」と口を揃える。

て、知ることの大切さと、知ってなおかつ一步踏み出す勇気を学んだ」と口を揃える。

活動歴20年、EM活動を牽引 柴田町 自然となかよしの会

自然となかよしの会（伊藤玲子代表）は、活動歴20年になる、県内EM活動の牽引車ともいえる団体だ。現在は、9人のメンバーで、ボカシづくり、小学校の4力所のプール浄化、河川浄化、町の環境イベントでのEM石けんなどの販売を行っている。震災後は、新たに加わったEM仲間の活動レベルアップを支援するなど、次代を担うEM活動の後継者育成の役割を担っている。代表の伊藤さんは「病気をきっかけにEMと出会い、とにかくEMを知りたくて、勉強会を開いた」と同会発足のきっかけを話してくれた。新しい仲間へのやさしいまなざしは自身の活動の原点から来ているのかもしれない。



伊藤玲子氏（右から2番目）とメンバー、鈴木徹世話人（奥）

ベテランと若手が集いの開催に向け一丸となって邁進 Uネットみやぎ 「善循環の輪みやぎの集い」実行委員会

実行委員会（鈴木徹代表）には、伊藤玲子さんはじめ活動歴の長いベテランとともに、前述した「おむすびの会」、泉区寺岡の「EMタイムズ」といった震災後の新しい団体も出席し活発な意見交換が行われた。ここでは、「集い」の開催という共通の目標に向け、ベテランと若手が協働する場となっており、宮城県のEM活動の活性化を肌で感じた。「今回は意気込みが違う」と鈴木代表。集い当日は、Uネットみやぎ主催の「天のしづく」上映会も行われる予定だ。

野生動物保護活動にEMを活用 仙台市 武田修氏

武田氏は、非常勤の県職員である自然保护委員として、獣医師とともに野生動物の保護活動を行っている。



カモシカの世話をする武田修氏

EMとの出会いは2009年、近所の主婦に勧められたのがきっかけだ。野生動物に消毒薬を一切使わない武田さんは、衛生改善と消臭対策を兼ねて、早速、飼育動物の匂いの中に米のとぎ汁発酵液を散布したところ、臭いが消えたばかりでなく、病気が蔓延しないことに気がついた。以来、EMを毎日散布している。ちなみに、発酵液に使う水は湧水を使用している。

「カモシカは薬品に非常に弱い動物です。観察していると、土を食べることがある。体内の菌の状態を把握していて、不足を感じると土から摂取しているのでしょうか。自ら病気を予防し治すすべを知っているのです」（武田さん）。



山岳信仰の頂点・富士山。そこにはEMの歴史もあった。

～静岡県富士宮市～

EM団子の歴史は富士山にあったのか!

日本文化の源泉・富士の山。日本では13番目となる世界文化遺産登録を記念して、静岡県富士宮市で脈々と活き続けるEM文化のその後を追った。遡る事約25年、富士山の大沢崩れ問題に端を発した「富士山を守る会」の活動は、メンバーの宮崎善旦氏、佐野基氏等が中心になって行われた。大沢崩れが社会問題化していた時期、防止策



EMボカシ団子
を国をあげて取り組んでいた中で、土と米糠、モミ、雑草の種子を混ぜEMで固めた“EMボカシ団子”を作り、登山者にも協力を得て、山頂まで上げてもらひ大沢崩れ現場に投下したのです。その甲斐あって雑草とはいえ、新芽が芽吹き少しづつ活着し、大沢崩れはひとまず収まったと言う。

これより先、森林限界(5合目)よりも高い場所で植物は育つか、との疑問には富士山頂での発芽実験(1988年)を試み、自信を深めたと当時のメンバー達は異口同音に語ってくれた。EMで森林



富士山頂・頂上富士館・館主の宮崎善旦氏(前列中央)と「善循環の輪 静岡の集いin富士宮」の委員の皆さん、及び東海北陸地区世話人 小川敦司氏(前列左)。

限界は6.5合目から7.5合目に上がった、と言う佐野基氏の言葉は達成感がみなぎっていたが、どうしたことか、この頃を境に運動は下火になって行く。EMの成果を国やマスコミは何一つ

語っていない。ただはっきりと言える事は、環境条件の厳しいところでも斜面を安定させ、適度の水分と栄養素があれば、植物はたくましく生育できること、を示した事にある。

樹木ではないが、雑草(草本植物)であれば3000m付近にまでコロニーを形成しているのも頷ける。

現在では、この“EMボカシ団子”は河川、沼、湖、海、池等の水質改善用“EM団子”として多くの実績を持つ。成分や目的の違いはあるものの、EM文化を根付させた原点が富士山にあったと言えそうだ。

授産所・にこにこサポートふれあい(EMボカシネットワーク)

EMボカシネットワークは1994年に設立され、日本国内中心に31支部約330施設が参加するもので、EMの輪を拡げている。障がい者施設の授産所でEMボカシを作り、家庭菜園や環境浄化に役立てているが、授産所に集う障がい者達の仕事確保と収益金によるあらたな活動への意欲向上に貢献している(にこにこサポートふれあい 所長・内



藤善仁氏)
この“EMボカシネットワーク”の歴史は富士山を守る会の活動時期と符合するが、ごみの堆肥化、「ゴミゼロ」活動、化学肥料に頼らない自然野菜作り、等は今日に至るまで続いている。

i n f o r m a t i o n

事務局からのお知らせ

■訂正とお詫び(U-net通信 vol.74)

吹田市カフェダイニング『オリビオ』の紹介文中の、「食材はEM栽培の野菜や米で肉・麺もEM使用のものだ。」の中の「肉」を削除いたします。訂正してお詫びいたします。

■訂正とお詫び(U-net通信 号外)

比嘉理事長と山田元農水大臣の対談部分、3ページ目の最初の2行は誤植で不要な文章です。上記2行を削除してお読みくださいますようお願い申し上げます。訂正してお詫びいたします。

■今後の主要行事のご案内

- 第4回 全国一斉EM団子・EM活性液投入 日程 7月15日(月・祝)
- 善循環の輪・宮城の集いin仙台 日程 8月31日(土) 会場 141仙台ビル6階 ギャラリーホール
- 善循環の輪・静岡の集いin富士宮 日程 9月21日(土) 会場 富嶽温泉 花の湯